九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

レーニンの農民革命論に関するノート : 二月革命まで

中山, 律雄

https://doi.org/10.15017/2920527

出版情報：経済論究. 11, pp.20-39, 1962-05-20. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

レーニンの農民革命論に関するノート

——二月革命まで——

中　山　徹　雄

マルクス主義農業理論の基本的課題は，資本主義的な諸関係のなかにあつて，小ブルジョア的性格をもつている農民層が，いかなる過程をへて，いかなる階級的性格を与えられつつあるかを，明らかにすることである。すなわち，プロレタリアートの同盟軍としての農民諸階層の階級的性格を明らかにすることである。1894年11月に，エンゲルスは，次のように農民問題の重要さを指摘している。「社会主義党による政権の獲得は，まじかな将来にせまつた。けれども政権を獲得するためには，この党は，そのまえに都市から農村にでてゆかねばならない。農村において，一つの勢力とならねばならない」[(1)]と。

このような，プロレタリアートと農民との同盟の問題は，レーニンによつて，理論的にも，実践的にも，大きく発展させられた。「農民の国であり，ヨーロツパのもつともおくれた国の一つである」ロシアで，プロレタリアートの指導のもとに，いかに農民の協力をかちとり，プロレタリアートが権力に到達するかということが，レーニンの革命論の基本問題をなしていたともいえる。そして，レーニンの農民革命論の展開のなかに，理論と実践との美事な弁証法的な発展を見出すことができるのである。本稿では，第一次ロシア革命をへて二月革命にいたる，レーニンの農民革命論の発展を考察してみたい。

一　1903年の農業綱領

周知のように，レーニンの理論的・実践的活動は，19世紀末のロシアに根をおろしていたナロードニキの農業理論にたいする，徹底的な批判をもつてはじまり，『ロシアにおける資本主義の発展』(1896～99年に執筆) において集大成をみたのである。それは，ロシアにおける資本主義の発展を，豊富な資料にもとずいて明らかにするとともに，プロレタリアートの階級的役割を明確にし，ロ

シア社会民主党の農業綱領の結実へと導くものであつた。

すでにレーニンは，『「人民の友」とはなにか』(1894年春—夏に執筆) において，ロシアのマルクス主義者の任務を示し，それが，社会主義的労働者党の組織化にあること，さらに，労働者階級こそが，農民との革命的同盟によつて，ツアーリの専制政治，地主，ブルジョアジーを打倒しなければならないということを明らかにしている。そのほか，『発展』にいたる著作のなかでは，資本主義発展の法則の貫徹の事実とともに，ロシアの農村にふかく根をおろしている封建制の残存物の問題を重視して，当面の任務がブルジョア革命であることを，指摘している。ところが，『発展』においては，それがナロードニキ批判の集大成として，「ロシアにおける農業関係の発展は，地主経営でも，農民経営でも，『共同体』の外部でも，その内部でも，資本主義的な仕方でおこなわれていること。……そして，この発展が，ほかならぬ資本主義的な発展の道を，ほかならぬ資本主義的な階級区分を，すでに決定的に確定したこと[(2)]」を証明しようとしたものであつたために，実際にロシア農業の資本主義化をはばんでいた，債務奴隷制とか，高利貸業，雇役，その他の封建制の残存物の問題は，意識的に捨象されている。そのことは，当然な，不可避的な方法であつたとはいいながらも，その後の農業綱領の作成において，資本主義的発展の程度を過大に評価する誤りをおかすことになつたのである。

19世紀末から20世紀にかけての労働・農民運動の高揚は，社会主義政党の結成と，党綱領の制定を緊急の課題にした。綱領作成にあたつて，レーニンは，『発展』において捨象していた封建遺制の問題を，『ロシア社会民主主義者の任務』，『わが党の綱領草案』『労働者党と農民』などにおいて，ふたたび全面的にとりあげた。当時のロシアの農民が，資本の圧制のためだけでなく，それ以上に，地主の圧制と農奴制の残存物のために苦しんでおり，したがつて，ロシアの農村における階級対立は，「第一には，農村労働者と農業企業家との対立であり，第二には，全農民と全地主階級との対立である。第一の対立は発展し，成長しつつあり，第二の対立はしだいによわまつている。前者はまだまつたく未来のものであり，後者はすでにいちじるしく過去のものとなつている。だが，それにもかかわらず，こんにちのロシア社会民主主義者にとつて

は，ほかならぬ第二の対立こそがもつとも本質的な，また実践上もつとも重要な意義をもつている[3]」ということが明確にされた。すなわち，ロシアにおける農民問題とは，前資本主義的な諸制度と諸関係にくるしめられている農民であり，農民が小ブルジョアジーと賃労働者とに解体していく過程すらもが，古い農奴制的諸制度の枠内で進行している点にある。——したがつて，ロシアの社会民主主義的な綱領の指針となるべき基本原則は，「（1）農村におけるいつさいの前資本主義的・農奴制的諸制度と諸関係を廃絶すること。（2）農村の階級闘争に，いつそう公然かつ意識的な性格を付与すること[4]。」であるとされた。

こうして，実質上レーニンの手になる社会民主党の綱領は，1902年の夏に発表され，プレハノフやその他との多くの論争をへて，1903年8月のロシア社会民主党第二回大会で正式に採択された。なかでも「農業綱領」は重要な位置をしめた。

この綱領は，一方において，ロシア社会民主党の終局目標が，「プロレタリアートの社会革命とその不可欠の条件であるプロレタリアートの独裁の確立」にあることを明らかにし，そのために近代社会の一階級としてのプロレタリアートの運動を，唯一の真に革命的な運動として強調している。この目標からすれば，近代社会における小土地所有者および小農耕者の階級としての農民の利益を擁護することはできないわけである。しかし，いま一方で，「ロシアでは，資本主義はすでに支配的な生産様式になつているが，まだ，地主，国家あるいは国家首長への勤労大衆の農奴的隷属に基礎をおく，わが国の旧来の前資本主義的制度のきわめて多数の残存物が保存されている。これらの残存物は，経済的進歩をきわめて強力に阻害しており，プロレタリアートの階級闘争の全面的発展をゆるさず，国家および有産階級による幾千万の農民の搾取のもつとも野蛮な諸形態の維持と強化をたすけ，全人民を無知と無権利とに引きとどめている。

このすべての遺物であり，この野蛮全体のもつとも強力な砦であるのは，ツァーリ専制である[5]」という点が明らかにされ，したがつて，ロシア社会民主党の当面の任務は，ツァーリ専制の打倒を目標とするブルジョア革命であるとさ

れた。

ここで，レーニンは，ブルジョア革命にたいする，プロレタリアートと全農民との同盟をとき，それを強化するために，綱領の「労働者の部では社会改良的要求の範囲を出てはならないが，農民の部では社会革命的要求をさえかかげるのをためらつてはならない」[6]ことを強調した。けだし，「農奴制にたいしては，また農奴制的地主およびこの地主に奉仕する国家にたいしては，農民はまだ依然として一階級であり，しかも，資本主義社会の階級ではなく，農奴制社会の階級，すなわち身分的階級である」[7]からである。こうして，農業綱領においては，「旧来の農奴制度の残存物を除去することを目的とし，また農村における階級闘争の自由な発展をはかるため」[8]の諸改革が要求された。そしてレーニンは，「農村における階級闘争の自由な発展をはかる」点が，革命的マルクス主義理論を，ナロードニキ的，社会改良的な諸理論から峻別するものであることを強調している。ブルジョア革命において，ブルジョア民主主義的任務を解決すればするほど，農民分解もそれだけ進展し，農業ブルジョアジーにたいする農業プロレタリアートの階級闘争が発展するものと想定されているのである。

この農業綱領の具体的要求のなかで，きわめて重要な位置をしめているのは，切取地の返還に関する要求であつた。「農奴制の廃止のさい農民から切り取られ，地主の手中にあつて農民を債務奴隷化する道具となつている土地を，村落共同団体に返還する」[9]という項である。レーニンは，資本主義の発展を阻止している農奴制の直接の遺制が雇役制度であり，雇役制度のもつとも主要な源泉の一つが切取地であると考えていた。したがつて，切取地を取り返すことが，農村における階級闘争の自由な発展のための道をきよめることになると考えられたし，その場合の切取地も，「個々の切取地ではなく，なお存続している農奴制経済の残存物の土台になつている」，「非隨意的，債務奴隷的，賦役的な労働，すなわち，実際上同じ農奴制的労働を引きつづき維持する手段となつている」[10]切取地だけに，はるかにせまく限定されていた。しかし，第一次革命の過程における農民運動の歴史的経験がこの農業綱領のこの条項の不十分さをしめし，1903年の農業綱領の改訂が問題になるのである。

二　農業綱領の改訂

実際，第一次ロシア革命は，ロシアにおける農民運動について，農民の土地闘争の性格や意義について，大きな歴史的経験をあたえた。そして，この経験にてらして「農業綱領」の改訂をすることが，無条件に必要になつてきた。そのことは，とくに，実践面において全国的な農民運動の経験にもとずいて，農民がすでにどの程度まで資本主義的に分解しているか，この農民は革命的な民主主義的変革にたいしてどの程度の能力をもつているかという問題」を考慮にいれることであつた。[11] さきにのべたように，1903年の農業綱領の主要な条項である「切取地」についての項では，農奴制的債務奴隷制的搾取に役立つている土地と資本主義的に利用されている土地との，大まかな区分が根拠とされていた。しかも，切取地そのものも，「本質上純賦役的な型の古い経営」の所有している切取地だけに限定されていた。ところが，農民大衆の運動は，特別な農奴制的搾取に役立つているような地主所有地にたいしてではなくて，ただ地主的土地所有一般に反対して展開されたのである。

そのことは，農民の土地闘争の目標が，農奴制的な巨大な土地所有であることを示している。農民改革後のロシアの農村には，農奴制的関係とブルジョア的諸関係との非常に複雑な絡み合いが存在していたにもかかわらず，実際に支配的であつたのは，巨大な地主所有地における農奴制的搾取によつて零落しつつある小規模耕作であつた。「全体としてロシアのこんにちの地主経営は，資本主義的経営方式によるよりも，むしろ農奴制的＝債務奴隷制的経営方式によつて，維持されている。このことを否定するものは，ロシアにおけるこんにちの広範で奥深い革命的農民運動を説明することができないであろう」。[12] 農村における農奴制の残存物は，レーニンが考えていたよりもはるかに強力だつたわけである。

もちろん，レーニンは綱領の改訂が問題になつたさいに，「当時われわれの切取地が，この項目の作成者たちがそれを理解したよりもせまく解釈された」[13] とのべ，切取地はけつして垣根ではなくて，「もつとさきにすすんでいくための扉」[14] であり，そして，すべての土地を農民へ引きわたせという要求は，そこ

ではけつして排斥されていないで，ある政治情勢のもとでなら歓迎されてさえいたことを，しばしば強調している。しかし，その扉から次にきたるべき道は，労働者と農村プロレタリアートないしは半プロレタリアートとの同盟による，働く勤労人民全体の完全な解放への道が想定されていたに違いない。

レーニンが『1905—7年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』でのべているように，1903年の農業綱領の誤りの根源は，綱領作成の当時，農奴制度の残存物はつまらない部分的問題のようにおもわれ，資本主義的農業の諸要素が，地主経営にも農民経営にも完全に形成されていることを前提としたこと，すなわちロシア農業における資本主義発展の程度を過大に評価したことにあつた。そのために，そこから「切取地」の過大評価と，農民層分解の過大評価が生じたわけである。一方では，債務奴隷制的な切取地以外の地主経営では，資本主義的農業の諸要素が完全に形成されているとみなされたのであるから，そういう切取地を没収しさえすれば，資本主義発展のための道が清められることになる。いま一方では，農民層分解が進んで強力な農民ブルジョアジーが分離しているとすれば，彼等は，土地一般の没収にたいしては抵抗を示すにちがいない。そのために，土地にたいする全農民の要求をまとめることができる点は，切取地返還闘争に絞ることであると考えられたのである。「農民全体は，一体となつては，切取地の返還という要求をこえてすすむことはとうていできないであろう。なぜなら，このような土地改革の限界をこえるなら，農村プロレタリアートと『経営上手な百姓』との敵対が不可避的にはつきり現れてくるからである」[15]という考えがそれである。

しかし農民運動のなかで，農奴制の遺制がはかりしれないほど大きいものであり，農民が望んでいるものが土地と自由であるということが明らかになつたいま，切取地綱領の誤りを固守するわけにはいかなかつた。誤りの訂正は，農業制度のなかにある古いものの残存物との闘争という部分的任務の代りに，一切の古い農業制度との闘争という任務をおくことであつた。綱領の改訂が問題になりながらも，それがはつきりと決議されるに至つたのは，タンメルフォルスにおける「多数派」協議会(1905, 12, 12—17日)においてであつた。協議会は，切取地の条項を削除してその代りに，「党はすべての国有地，教会領地，修道

院領地，皇族領地，御料地および私有地の没収をもふくむ農民の革命的措置を独自に組織し，彼らに彼らの利害と農村ブルジョアジーの利害とは和解しがたく対立していることを説明し，それのみが社会の階級への分裂と人間による人間のあらゆる搾取とを廃絶することのできる社会主義の終極目標をおしえることを，自分の主要かつ恒常的な任務とすること[16]」を決議した。

革命の高揚期がすぎ，ストルイピンの反動的農業政策の進行という情勢のなかで，1907年末，レーニンは『1905—1907年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』を執筆して，この時機における党の農業綱領にたいする考えを明らかにした。『綱領』で展開された理論の中心問題は，いうまでもなく「農業における資本主義発展の二つの道」であり，いま一つは，土地国有の理論である。

『綱領』において，土地闘争の中心は，農奴制的巨大土地所有であるが，資本主義の発展は，絶対的な不可避性をもつて，この農奴制の残存物の始末をつけること，したがつてロシアのまえにあるのはただひとつ，ブルジョア的発展の道だけであることが，説かれる。しかし，そのさいに「農奴制の残存物は，地主経営の改造という道によつても，また，地主的巨大土地所有の廃止という道によつても——すなわち，改良の道によつても，革命の道によつても，消滅しうる[17]」ことが明確にされる。「ロシアの経済史では，進化のこの二つの型はまつたく明瞭に現れている。農奴制度の没落期をとつてみよう。改革の実施方法をめぐつて，地主と農民とのあいだに闘争が行なわれた。どちらも，ブルジョア的経済発展の条件を主張していた（そうとは意識しなかつたが）。だが，前者が主張していたのは，地主経営，地主的な所得，地主的（債務奴隷制的）搾取方法を最大限に維持することを保障するような，そういう発展の条件である。後者が主張していたのは，当時の文化水準のもとでは一般に可能な最大限の程度で農民の福祉を保障し，地主的巨大土地所有の廃止，いつさいの農奴制的および債務奴隷制的搾取方法の廃止，自由な農民的土地所有の拡大を保障するような，そういう発展の利益である[18]」。そして，1861年から1905年までのロシア農業は前者の道を歩いてきたし，またストルイピンの綱領もそうであり，このことがロシア農業における資本主義の発展を阻止している，という。した

がつてロシア革命では，現実の闘争は資本主義のためにではなく，資本主義の発展の型のために行われていることが強調される。「これまでのすべての綱領の基本的な誤りは，ロシアにおける資本主義的農業進化の型にどういうものがありうるかという点について，十分具体的な観念をもたなかつたことである」[19]。

このように，農奴制度の残存物に反対し，農業制度のうちにあるすべての中世的なものに反対する農民革命における，プロレタリアートの正しい農業綱領は，地主的ブルジョア変革にたいする農民的ブルジョア変革の道にもとめられる。それは，農業における資本主義のもつとも自由な発展のための，すべての古い——地主のものであろうと農民のものであろうと——農奴制的巨大土地所有の廃止である。第一次ロシア革命の経験からすれば，この経済的必要は，土地の国有，あらゆる土地の国家の所有への移転だけであつた。すなわち「ストルイピン的土地改革か，それとも農民的・革命的国有化か」という形での経済的解決が提起されるに至つたのである。ただここで注意をむけておきたいのは，当時レーニンは，そのような農民革命のあとに，そこを出発点として，「農業の自由な資本主義的進化の代表者」としての農民による，賃労働，機械，高度の農業技術を基礎とする新しい資本主義的農業経営制度が発展するものと，考えていたことである。

三　当面する革命＝ブルジョア革命

農村にたいして都市においては，発達しつつある資本主義とプロレタリアートの運動が進んでいた。農業部門においても，はるかに限定されたものではあつても，農業ブルジョアジーにたいする農業プロレタリアートの対立が存在していたことは，事実であつた。そのような資本主義的諸関係と，前資本主義的関係との複雑な絡みあいは，当面するブルジョア革命に特異な性格を与えないではおかなかつた。

それは，ブルジョア革命である限り資本主義の打倒を直接の任務とするものでないことは，いうまでもないが，そのなかに多くの社会主義的闘争の性格をふくんでいるブルジョア革命である。したがつて，ブルジョア革命であるにも

かかわらず，その指導的な推進力になることができるのはプロレタリアートであることが強調され，プロレタリアートと農民との同盟による革命の遂行がうちだされたことにある。「わが国では，ブルジョア革命の勝利は，ブルジョアジーの勝利としては不可能である。これは逆説のように見えるが，事実である。農民人口の優勢，（半ば）農奴制的な大土地所有による農民のおそるべき抑圧状態，すでに社会主義政党に組織されているプロレタリアートの力量の自覚——これらすべての事情が，わが国のブルジョア革命に特殊の性格をあたえている。……この特殊性は，やがてブルジョアジーの反革命的性格と，このような革命で勝利するにはプロレタリアートと農民の独裁が必要であるということとの原因となつているにすぎない。なぜなら，ブルジョア革命で勝利をおさめる『プロレタリアートと農民との同盟』こそ，プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁にほかならないからである[20]」。

こういうロシア革命の特異性を，後年（1917年）レーニンは，「まさに，この革命がその社会的内容から見ればブルジョア民主主義革命であつたが，その闘争手段から見ればプロレタリア革命であつた点にある[21]」と講演している。そのように，もはやブルジョアジーによつて指導されるのではなく，プロレタリアートがヘゲモニーをとつたブルジョア革命においては，革命のもろもろのエネルギーを，ブルジョア民主主義的なものと社会主義的なものとに，劃然と判別することはできない。プロレタリアートの終極目標が，社会主義革命にある以上，都市プロレタリアートは，全農民とともに，ツァーリ君主制や地主と闘うが，同時に農村プロレタリアートとともに資本と闘わなければならない。プロレタリアートには，「土地と自由のためのたたかい」と「資本の搾取と支配にたいするたたかい」との，二重の任務が課されるわけである。レーニンの次の言葉は，当然なことではあるが，この問題について大きな示唆を与えてくれるものである。「具体的な歴史的環境のもとでは，過去の要素と未来の要素はからみあい，一方の道は他方の道とあい交代する。……歴史のうえでは，二つの変革の個々の部分的な要素がたがいにからみあうということを，否定できるだろうか？　ヨーロツパの民主主義革命の時代に，いくつかの社会主義運動や社会主義的な企図がなかつただろうか？　また，ヨーロツパの将来の社会主義

革命には，民主主義の点でまだ非常に多くの仕事がのこされているのではあるまいか？[22]」。

いずれにしても，進行しつつある民主主義革命がブルジョア的性格のものである以上，階級としてのブルジョアジーの支配力も強化されることは，いうまでもない。そして，工業部門におけるブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争がすすみ，すでに社会主義政党に組織されているプロレタリアートの力が存在する20世紀のロシアにおいては，ブルジョアジーは，すでに反革命的であつた。プロレタリアートに対抗するための手段として，旧時代のいくらかの残存物——たとえば君主制や官僚勢力などを支柱として保持することに利益を感じるほどの性格すらもつていた。そのかぎりでは，ツァーリズムにたいする決定的な勝利は，プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁よりほかになかつたのである。そして，この成否いかんは，まさにプロレタリアートと農民との同盟の力いかんにかかつていたということができる。

しかし，ここでいま一つの新しい問題が提起される。それは，ロシア革命が勝利をおさめた場合に，その獲得した諸権利を，どうして維持・強化していくかという問題であつた。プロレタリアートに課せられていた二重の任務のそれぞれを，分離しなければならない時がくるわけである。レーニンは，土地の没収までふくめて，農民運動をあらゆる手段で援助しなければならないという方針をたてたが，それも農民運動が革命的民主主義的であるかぎりでのことであつた。換言すれば，農民の革命的民主主義的な運動によつて，プロレタリアートの党が，それだけ容易にそれだけ早く，社会主義革命という新しい任務にうつることができるようにするためでもあつた。当面する革命がブルジョア革命であり，民主主義的変革の枠を直接にはこえることができないということを十分みとめながらも，その革命が勝利すれば，その時には，社会主義的変革のためのプロレタリアートの闘争がはじまるであろう。「われわれは，民主主義革命からただちに社会主義革命に移行しはじめる。しかもまさにわれわれの力に応じて，自覚した組織されたプロレタリアートの力に応じて，移行しはじめるだろうからである。われわれは永続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしないであろう[23]」とレーニンはのべている。そのときには，ブルジョア

ジーの革命性はもちろんのこと，小ブルジョアの革命性すら失われることになるであろう。「彼らは，労働者階級とともに，農奴制と警察的専制にたいして闘争する。だがそれと同時に，彼らは，ブルジョア社会における所有者としての自分たちの地位を強固にすることに心をひかれ，したがつて，また，この社会の発展条件がいくらかでも順調に形成されていくならば，小商品生産者は，社会主義のためにたたかうプロレタリアートにかならず反対する[24]」ようになる。

そういつた，いわば資本主義的復古をふせぐためのプロレタリアートの任務は，農村プロレタリアートを独自に組織し，それと半プロレタリア分子との同盟を強化することであつた。レーニンは，ブルジョア革命の過程でも，しばしば，農村プロレタリアートにたいして，「完全な社会主義的変革をめざす闘争のために，都市プロレタリアートとともにみずからを独自に組織しなければならない」ことを強調してきた。そうして，革命が，革命的階級によつてできるだけ決定的に実現されること，そして最後まで革命が遂行されることが，復古をふせぐ相対的な保障になるのである。

しかし，ブルジョア的復古にたいする絶対的保障については，レーニンはそれを西欧の社会主義革命にもとめた。「もし復古をふせぐ，真の，十分確実な経済的保障，すなわち復古をけつしてゆるさない経済的諸条件をつくりだすような保障，について言うなら，復古をふせぐ唯一の保障は——西欧の社会主義的変革である，と言わなければならない。真の完全な意味では，これ以外にはどのような保障もありえない。……この条件がなければ，公有化のばあいにも国有化のばあいにも，分割のばあいにも，復古は避けられない。なぜなら，どんな領有形態，どんな所有形態のもとでも，小経営者は復古の支柱となるだろうから。……わが民主的共和国は，西欧の社会主義的プロレタリアート以外に，どんな予備軍ももたない[25]」というのである。それはロシアが主として農民の国であり，小ブルジョアの国であつて，プロレタリアートが組織，訓練，意識などの点において，まだきわめて不十分であると考えたからである。レーニンの復古にたいするこのような考えは，二月革命の直後にのべた「ロシアは農民の国であり，ヨーロツパのもつともおくれた国の一つである。直接には，こ

の国でいますぐ社会主義が勝利することはできない[26]」という考えにつながるものである。

四　二月革命＝ブルジョア革命

前節までにのべてきた，当面するブルジョア革命にたいするレーニンの革命論は，二月革命にいたるまで，その本質において変化はみられない。

二月革命において，ロシアの国家権力はブルジョアジーの手にうつつた。ツァーリの絶対主義権力がブルジョアジーの手にうつつた，まさにその意味において，二月革命がブルジョア革命であることについては，異論をさしはさむ余地はない。いうまでもなく，あらゆる革命における基本的な問題は，国家権力の問題である。「革命という概念の厳密に科学的な意義においても，その実践的＝政治的な意義においても，国家権力が一つの階級の手から他の階級の手にうつることが，革命の第一の，主要な，基本的な標識である[27]」。

二月革命の最初の段階は，（1）ブルジョア的，地主的なオクチャブリスト的＝カデット的ロシア——そのうしろには小ブルジョアジー（その主要な代表者はケレンスキーとチヘイゼ）がくつついている——，と，（2）プロレタリアート全体と貧困な住民大衆全体とに同盟者をもとめている労働者代表ソヴェト——，が協力して，（3）農奴主的地主の首長であり，古い官僚と将官の首長であるツァーリ君主制——を打倒して，資本主義的地主とブルジョアジーの階級が政治権力に到達したことにあつた。レーニンは，「このかぎりで，ロシアのブルジョア革命またはブルジョア民主主義革命は，終了した[28]」と，はつきりのべている。たとえ条件つきではあつても，ブルジョア革命が終了した以上，次にかかげるべき任務は，社会主義への一歩を開始するために，「革命の第二の段階での自分たちの勝利を準備するために，プロレタリアートと全人民を組織する[29]」ことであつた。

ところがこの点にかんして，当時「古参ボルシェヴィキ」と自称する人々から疑問が提出された。それは，「われわれはつねに，『プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁』だけがブルジョア民主主義革命を終了させる，と言つてきたのではなかつたか？　おなじくブルジョア民主主義革命である土地

革命ははたしておわつたであろうか？むしろ逆に，土地革命はまだはじまつていないということが事実なのではなかろうか？[30]」というのであつた。この古参ボルシェヴィキの疑問を拠りどころにしながら，二月革命について若干考察してみたい。

すでにのべたように，ロシアのブルジョア革命の特殊性は，ブルジョアジーがもはや革命の推進力になりえず，その推進力がプロレタリアートであり，彼らと農民との共同行動によつて革命的階級が政治権力を獲得することにあつた。「ロシアのブルジョア革命の特殊性は，16，17，18世紀には第二位にあつた都市の平民分子にかわつて，20世紀には，プロレタリアートが第一位に進出している[31]」ということであり，それはまた，「社会経済全体が資本主義的性格のものであるところで中世的なものに反対する農民革命[32]」としてのブルジョア革命ということでもあつた。

1861年の農民改革は，その性格，内容からみてブルジョア的なものであつた。封建社会の胎内で発展してきた資本主義的な生産力と農奴制的生産関係との矛盾の解決をせまられた，農奴主によつて実施されたブルジョア的変革であつた。「『偉大な改革』は，農奴主的な改革であつたし，またそれ以外のものではありえなかつたというのは，それを実施したのが農奴主であつたからである。ではいつたい，どのような力が彼らに改革に着手しなければならないようにさせたのであろうか？　それは，ロシアを資本主義へ引き入れつつあつた経済的発展の力である。農奴主的地主は，ロシアとヨーロッパとの商品交換の成長を妨げることができなかつたし，古い，くずれた経済形態を維持することもできなかれた。クリミア戦争は，農奴制ロシアの腐朽と無力とをしめした。農民『一揆』は，解放のまえには十年ごとに大きくなつてきて，第一の地主アレクサンドル二世に，下から打倒されるのをまつよりも，上から解放したほうがよい，とみとめることをよぎなくさせた[33]」。それが地主自身，専制的ツァーリの地主政府とその官吏によつて行われたために，はかりしれないほど大きな農奴制の残存物が，ブルジョア的発展を阻害したが，しかし発展の方向を変えることはできなかつた。「農奴制の崩壊後，ロシアには，ますます急速に都市が発達し，工場が増加し，鉄道が敷設された。農奴制ロシアにかわつて，資本主

義ロシアがあらわれた。定着し，うちひしがれ，自分の村にすつかり根をはやしてしまつた，僧侶を信じ，『司政長』をおそれる農奴制農民にかわつて，都市へ出稼ぎに行き，渡り鳥生活や賃仕事の辛い体験からなにかを学びとつた農民の新しい世代が成長してきた。大都市の工場では，労働者の数はますます増加していつた。しだいに，資本家および政府との共同闘争のために，労働者の団体が形づくられるようになつた」[34]のである。

こうして1861年以降，ロシアの国家権力は，農奴制地主とブルジョアジーとに階級的基盤をもとめる絶対主義権力に急速に転化していつた。それは，ブルジョア君主制に転化していく方向にあつた。しかしこの時代は，旧体制，社会勢力の旧来の相互関係の基本的特徴には手をふれないまま，古い問題の古い解決を準備する方法をとつていた。第三国会とストルイピンの農業政策とは，農奴主的ツァーリ専制によつて実施された第二のブルジョア的変革であつた。

くり返しのべたように，ロシアでは，ブルジョア革命が完成されないうちに，すなわち，国家権力がブルジョアジーの手に移るまえに，ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立は，和解しがたく激化していたのである。自由主義的ブルジョアジーと旧権力との衝突は決定的なものではなくなり，逆に決定的であつたのは，農民と地主，プロレタリアートとブルジョアジーの衝突であつた。「この現象はなにによつて説明されるか？　第一に，自由主義的ブルジョアジーが経済的紐帯であまりにも密接に地主的土地所有にむすびつけられており，両者の利害があまりにも相互にからみあつているので，自由主義的ブルジョアジーにとつて安全でのぞましいとおもわれるのは，けつして地主的土地所有の廃絶ではなく，その改革だけであるということによつて説明される。廃絶よりも，もつとも緩慢な，いな，目につかないほど緩慢な改革のほうがよろしい，と——自由主義的ブルジョアジーの圧倒的多数はこう判断している。そして，ロシアのいまの（1911—2年……筆者）経済状勢と政治状勢のもとでは，この階級はこれよりほかに判断できないのである」[35]。このようにして，ツァーリの君主制を倒す任務はプロレタリアートに課せられたのであつた。「ブルジョアジーの勝利としては，不可能な」ロシアのブルジョア革命における決定的な勝利は，プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁だつ

たわけである。

ところが，1917年2月，ツァーリ君主制は倒され，資本主義的地主とブルジョアジーの階級が，政治権力に到達した。そしてこの階級は，農民改革以後，とくに20世紀の急速な資本主義の発達のなかで，「ずつとまえからわが国を経済的に支配しており，また1905—1907年の革命の時期にも，1907—1914年の反革命の時期にも，さらに——しかもとくに急速に——1914—1917年の戦争中にも，地方自治体や，国民教育や，各種の大会や，国会や，戦時工業委員会等々を自分の手におさめることによつて，非常に急速に自分を政治的に組織してきた。この新しい階級は，1917年までにすでに『ほとんどすつかり』権力をにぎつていた[36]」。その新しい階級の手にロシアの国家権力がうつつたという，そのかぎりではブルジョア革命が終了したのであり，べつに問題はない。

従来の綱領にてらして問題になるのは，むしろ，プロレタリアートと農民が革命的民主主義的独裁に達しえなかつたことにある。その目標を達成するには，プロレタリアートと農民の自覚と組織力とが不十分であつた。「ロシアにおける現在の時機の特異性は，プロレタリアートの自覚と組織性とが不十分なために，権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から，プロレタリアートと貧農層の手中に権力をわたさなければならない革命の第二の段階への移行ということにある[37]」。ブルジョアジーが権力に到達したとはいえ，ブルジョア革命が終了した以上，かつてのプロレタリアートと全農民との同盟の任務は解消した。革命の第二の段階は，プロレタリアートが権力を握るべく，農民についても農業プロレタリアートと穀物を売ることのない小農耕者たちを富裕な農民から分離して，プロレタリアートと半プロレタリアが，自分の意識を高め，自分の力，自分の組織を強化することであつた。レーニンは，この時期のスローガンとして，プロレタリア的組織をくり返し強調している。

それでは，プロレタリアートと農民が，自覚や組織性や訓練の点で不十分であつたにもかかわらず，ツァーリ君主制が倒れて，ブルジョアージーが権力に到達できたのはなぜだろうか？　それについてレーニンはいくつかの主要な条件をあげている。たとえば，1905—1907年のプロレタリアートの革命的エネルギーや，1907—1914年の反革命の経験によつて，プロレタリアートと農民が，

階級相互の関係やツァーリ君主制にたいする諸階級の関係を決定しえたこと，である。しかし，ブルジョアジーが権力に到達した最大の条件——「全能の舞台監督」——は，帝国主義戦争であつた。ロシアのブルジョアジーは，1905—1914年にかけて，また，1914—1917年にかけてはいつそう急速に政治的に組織されてきた。そして帝国主義戦争をつずけるために，「全世界をだれよりも支配し略奪しているイギリス＝フランスの金融資本は，1905年には革命に反対しツァーリズムが革命を鎮圧するのをたすけた（1906年の借款）。いまでは，この金融資本は，きわめて積極的に革命に直接参加し，ニコライ二世を更迭するために，あるいは彼に譲歩を強要するために，グチコフ，ミリュコフらの諸君と，軍の最高将校層の一部との直接の陰謀を組織したのである」[38]。それと同時に，「これらの帝国主義的勢力に，さらに深刻で，強力なプロレタリア運動がくわわつた」[39]。このプロレタリア闘争がツァーリズムに最初の打撃をくわえたあとで，ブルジョアジーが権力に到達したのである。レーニンは，こういう事態について，ボルシェヴィキのスローガンと思想は正しかつたが，具体的には，事態が，だれにも予想できなかつた，より独特な，より複雑な形をとつた，とのべている。

革命の客観的条件が，だれにも予想できなかつたほどに複雑なものでなく，また，プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁に到達するほどに，プロレタリアートの主体的な力が強固なものであつたとすれば，ツァーリ君主制を倒したプロレタリアートは，それとともに，八時間労働日，地主のすべての土地の没収——という，かつてブルジョア革命の要求としてかかげてきた目標も実現しえたであろう。そして，革命がそういう形態をとるかぎり，プロレタリアートのブルジョア民主主義的闘争と社会主義的闘争とのあいだに，判然とした絶対的な一線を劃することは，事実上できないであろう。プロレタリアートが推進力になるかぎり，「こんにちの革命が完全に勝利すれば，民主主義的変革はおわつて，社会主義的変革のための断固たる闘争がはじまる」[40]からである。すなわち，革命の客観的条件と主体的条件がととのつたときには，ただちにプロレタリアートの社会主義的独裁に発展しうるものなのである。

現実の事態はそのようにすすまなかつた。国家権力に到達したブルジョアジ

ーの政府は，帝国主義的資本によつて手も足もしばられ，勤労者に対抗して資本の特権をまもるために，君主との取引すらおこなつている，そういう政府であつた。「この政府は，今日まで，憲法制定議会の召集の日取りさえ決めていない。この政府は，農奴制的ツァーリズムの物質的基礎である地主的土地所有に手をつけていない。この政府は，大銀行や資本家のシンジケート，カルテルなどの独占的金融団体の行動を調査し，公表し，それを統制することに着手しようとは考えてもいない」[41]。そのブルジョア政府に，もともとブルジョア民主主義的目標としてかかげてきた，八時間労働日や地主のすべての土地の没収などを期待することはできなかつた。その任務は，労働者代表ソヴエト——まだ崩芽的なものではあつたが成長しつつある——が果さねばならなかつた。そのために，レーニンが，当面のグチコフ＝ミリュコフの地主的＝資本主義的帝国主義との闘争にうつる過渡期における，最大のスローガンとして，プロレタリア的組織の強化を強調したことについては，すでにのべた。

ツァーリ君主制が倒れ，ブルジョアジーが国家権力に到達しているかぎり，プロレタリアートの次の目標が，社会主義革命であることは，いうまでもない。なるほど，二月革命においては，「八時間労働日」や「地主のすべての土地の没収」という柱は，実現にいたらなかつた。しかしそのことは，問題の本質をすこしも変えるものではない。それらは，いまではグチコフ＝ミリュコフ一派のブルジョア政権にたいするプロレタリアートの闘争の過程で解決さるべき目標なのである。具体的な歴史的環境のもとでは，社会主義的闘争の過程に，民主主義の徹底という点で，きわめて多くの任務が課されている。そういう意味で，二月革命を「不完全なブルジョア革命」とよぶならば，そうよんでもよいであろう。それは，すでにのべてきたように，革命における主体的条件の不十分さと，客観的条件——とくに帝国主義戦争によつてもたらされた諸条件の作用によるものであつた。

レーニンは，二月革命後ただちに社会主義革命，社会主義の導入を直接の任務とはしていない。古参ボルシェヴイキ，カーメネフの議論にたいして，レーニンは，「私は，われわれの革命を『ただちに』社会主義革命に『転化すること』を『めあて』にしているどころか，そうしてはならないとはつきり警告し

ているのであつて，テーゼの第八条で……『われわれの直接の任務は，社会主義を導入することではない』とはつきり言明しているのである[42]」とこたえている。少なくとも，社会主義革命への過渡的段階として，「ブルジョア民主主義革命の新しい段階」＝「まだ社会主義ではないが，社会主義への一歩」を考えていたことは，たしかである。その過渡的諸方策としてレーニンがあげているのは，国家権力を地主と資本家……の政府の手から，労働者と貧農の政府の手にうつし，地主所有地の没収（土地国有化）というような農民革命とむすびつけて，もつとも重要な物資の生産と分配を統制し，「全般的労働義務」を実施する等々を目標とする方策であつた。こういう方策は，「経済的には十分機が熟しており，技術的には無条件に，ただちに実施することができ，政治的には，これらの改革からあらゆる点で利益をうける圧倒的多数の農民の支持をかちえる[43]」，そういう条件をそなえていると考えられたのである。

そういう過程で，プロレタリアートが質量ともに組織的に強化されることが，社会主義革命の絶対的な前提とされていた。都市プロレタリアートと同時に，農村においても，過渡的方策としての「地主的土地所有の破壊と除去が断固として徹底的に行われれば行われるほど，また一般にロシアにおけるブルジョア民主主義的土地改革が断固として徹底的に行われれば行われるほど，富裕な農民（農民ブルジョアジー）にたいする農業プロレタリアートの階級闘争は，それだけ強力に，かつ急速に発展するであろう[44]」という考えに，この時期（1917年4月）でもよつていたのである。農民の土地変革にたいする物質的基礎は，依然として，農民的土地所有が，「分与地……と私有地……との別なく，古い半農奴制的な紐帯と関係や，農奴制度時代からうけつがれた農民の部類分けや，混在耕地制度その他等々に，上から下まで，がんじがらめにされている[45]」ことにあつた。そのために，農民革命によつても農民が，社会主義的になり，小ブルジョアでなくなり，反革命的でなくなるという保障はなかつた。そのことが，「ロシアは，農民の国であり，ヨーロツパのもつともおくれた国の一つである。直接には，この国でいますぐ社会主義が勝利することはできない[46]」という言葉にあらわれているのである。

ロシアにおける社会主義への道は，都市でも，農村でも，プロレタリアート

の組織力が強化されて，階級闘争が強力かつ急速に発展し，「都市プロレタリアートが，農村プロレタリアートをひきい，後者に農村の半プロレタリア大衆をむすびつけることに成功するか，それとも，グチコフ，ミリュコフの連中との資本家や地主との同盟に，一般に反革命に，心を引かれている農民ブルジョアジーのうしろにこの大衆がしたがうか，そのどちらかになるかによつて，——ヨーロッパではじまろうとしているプロレタリア革命がわが国に直接の強力な影響をおよぼさないかぎり——[47]」（傍点筆者）決定されるという考えであつた。

〔附記〕本稿は続稿を予定するものである。十月革命にいたる，また，十月革命をへて社会主義建設期におけるレーニンの「農業問題」は，続稿において取扱うことにする。

(1) エンゲルス「フランスとドイツの農民問題」邦訳新潮社版選集9巻P.188。
(2) 「イ・イ・スクヴォルツォフーステパーノフへの手紙」邦訳レーニン全集（以下同）16巻P.121。
(3) 「労働者党と農民」全集4巻P.463。
(4) 「わが党の綱領草案」全集4巻P.267。
(5) 「ロシア社会民主労働党綱領正文」全集月報第6集P.12。
(6) 「ロシア社会民主党の農業綱領」全集6巻P.108。
(7) 「同上」P.105。
(8) 「ロシア社会民主労働党綱領正文」全集月報第6集P.14。
(9) 「同上」P.15。
(10) 「労働者党と農民」全集4巻P.465。
(11) 「1905—1907年のロシア革命における社会民主党の農業綱領」全集13巻P.253。
(12) 「労働者党の農業綱領の改訂」全集10巻P.158。
(13) 「ロシア社会民主労働党統一大会」全集10巻P.278。
(14) 「貧農に訴える」全集6巻P.432。
(15) 「われわれの農業綱領について」全集8巻P.244。
(16) 「タンメルフォルスにおける『多数派』協議会の農業問題についての決議」全集10巻P.75。
(17) 「1905—1907……の農業綱領」全集13巻P.234。
(18) 「同上」P.235。
(19) 「ロシア革命における社会民主党の農業綱領」全集15巻P.146。
(20) 「ロシア革命の評価によせて」全集15巻P.41。

(21)　「1905年の革命についての講演」全集23巻P.262。
(22)　「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」全集9巻P.79。
(23)　「農民運動にたいする社会民主党の態度」全集9巻P.243。
(24)　「ロシア社会民主労働党統一大会についての報告」全集10巻P.319。
(25)　「ロシア社会民主労働党統一大会」全集10巻P.270。
(26)　「スイス労働者への告別の手紙」全集23巻P.405。
(27)　「戦術にかんする手紙」全集24巻P.27。
(28)　「同上」
(29)　「遠方からの手紙第一信」全集23巻P.338。
(30)　「戦術にかんする手紙」全集24巻P.27。
(31)　「わが革命におけるプロレタリアートの闘争目標」全集15巻P.365。
(32)　「1905—1907年……の農業綱領」全集13巻P.356。
(33)　「『農民改革』とプロレタリア＝農民革命」全集17巻P.111。
(34)　「農奴制崩壊50周年」全集17巻P.79。
(35)　「選挙カンパニアの原則的諸問題」全集17巻P431。
(36)　「遠方からの手紙第一信」全集23巻P334。
(37)　「現在の革命におけるプロレタリアートの任務について」全集24巻P.4。
(38)　「ロシア革命におけるロシア社会民主労働党の任務について」全集23巻P.38。
(39)　「同上」P.389。
(40)　「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」全集9巻P.125。
(41)　「わが国の革命におけるプロレタリアートの任務」全集24巻P.41。
(42)　「戦術にかんする手紙」全集24巻P.37。
(43)　「ロシア社会民主労働党（ボ）第七回（四月）全国協議会」全集24巻P320。
(44)　「同上」P.297。
(45)　「同上」P.296。
(46)　「スイス労働者への告別の手紙」全集23巻P.405。
(47)　「ロシア社会民主労働党（ボ）第七回（四月）全国協議会」全集24巻P.297。